

「大丈夫」は魔法の言葉

栃木県 吹上小学校 6年 永原 美海

朝目覚めて、体が動かない。学校に行かなくちゃいけないってわかっているのに……。

「早く起きて。何してるの。」

母のイライラした声、わかっている。ますます体が動かなくなり、布団をすっぽり頭までかぶって見えなくする。母の声が大きくなればなるほど体がかたくなって涙が出てくる。

私は5年生の2学期、そんな日々が続いた。きっかけはほんのささいなこと。部活で注意された。友だちが内緒話をしていた。私ってだめだな、自分のことかな、不安な気持ちになった。その不安はどんどんふくらんだ。いじめられたらどうしよう、みんな私のこときらいなのかな、そう思うと誰にも話しかけることができず、ひとりぼっちになった気がした。

私が学校を休むと、となり町に住んでいる祖母が犬を連れて家に来てくれた。

「大丈夫かい？」

やさしい言葉で体がまるで溶けていくようだった。心には学校に行かなかったという思い、かたまりがずっとあったけど……。

母、祖母、先生と私で話し、学校に行くこと決めた朝、無理に車から降ろされ、私はやはり泣いた。教室までの道のり、先生が百回ぐらい「大丈夫」って背中をさすってくれた。

教室はいつも通りだった。同じコーラス部の友だちが「大丈夫？」って声をかけてくれた。算数の割合がわからなくて困っていたら、となりの席の友だちが教えてくれた。何だか気が抜けるほどふつうで当たり前の日々。授業が終わる前、先生がこっそり私のポケットに小さなおにぎりを入れてくれた。朝食をとらなかった私に、母がにぎってくれたものだった。

「こっそり食べちゃいな。」

先生は耳元で私に言った。その言葉でお腹がすいていることに気がついた。ふりかけのおにぎりはおいしかった。母のことを思って少し涙が出た。それからは社会も体育の跳び箱も楽しくて、友達と大笑いをした。「全然大丈夫」って、みんなやさしく私を包んでくれた。私は何をこわがっていたのだろう。

今でも体が重くてつらい朝がある。でも自分は一人じゃない。みんなそばにいる。自分ではどうしようもない気持ちを周りの人が救ってくれる。

母や祖母、先生、みんなに心配をかけたけれど、自分の体験を通して、もし友達がつらい気持ちでいたら、わかってあげることができると思う。「大丈夫だよ」って、その不安な気持ちに寄りそうことができる。

心が敏感になっているときのなにげないあいさつ、言葉って心に染みわたる。笑顔で「おはよう」って言ってもらえただけで、心が落ち着く。「大丈夫」って言ってもらえると温かくなる。学校って楽しい。友だちってうれしい。家族ってあったかい。

「大丈夫」

私はこれからも何度も言うだろう。友だちだけでなく自分にも……。「大丈夫」は魔法の言葉だから。